親鸞における智慧の念仏について
――大乗の至極としての念仏義――

山　崎　龍　明
（武 蔵 野 大 学）

周知の通り親鸞の信仰，思想の本質は弥陀の本願にある。親鸞はその本願の核心である念仏が智慧と言い切ったのである。念仏のみでなく，信心も同様に智慧であると規定し，ある意味で念仏，信心観の変革をはたしたと言ってもよい

本論においては親鸞が念仏と信心を智慧と規定したという文献的探査にとどまらず，なぜ，親鸞にとって念仏と信心が智慧でなければならなかったのか，という視点に立脚していささかの論考を試みたいと考える。

1　仏道の基本としての智慧

一般に智慧とは「事物の実相を照らし，惑いを絶ってさとりを完成するはたらき。物事を正しくとらえ真理を見極める認識力，洞察力」（中村元『仏教語大辞典』）。特に智と慧に分けて「智とは世の中に向かって発現するもの相対の世界にははたらくもの。慧とはさとりを導くもの，さとりに於いてあらわれるもの」（同）と示される。

親鸞は「智はあれはあれ，これはこれと分別しておもひはからふによりて思惟になづく。慧は，このおもひにさだまりてともかくはたらかぬによりて不動になづく」という。ここでは智慧を不動三昧としている。ここには，

それが阿弥陀如来からたまわる仏智そのものであるという認識がみられる。

智慧の語は知られる通り『長阿含経』（大正藏1の2のC）『雑阿含経』41（同，2の298のA）『華厳経』（9の17のC）『維摩経』（14の537のA）『法華経』（9の6のC）等にみられる。また『仏所行讃』（4の3の中）『勝鬘経』（12の220のB）にも散見する。智慧の概念については，さきに記した通りのものであり，基本的にそれらを出るものではない。

2　仏道における「信」と「信心」

一般に信とは信澄浄の義とされる。又，四つの真理と三宝に対する確信であると示される（『倶舎論』）。また，信仰，精進，念，定慧の五根のことであり，心が清らかなること，真理に対する確信，といった規定が一般に知られるところである。特に広く知られるものは「若し人善根を種えて疑えば則ち華開けず。信心清浄なる者は華開きて則ち仏を見たてまつる」（「易行品」）「仏法の大海には信をもって能入となし。智をもって能度となす」（『大智度論』）といったものであろう。基本的には『長阿含経』（1の11のC）『中阿含』十巻（1の490のC）『無量寿経』下巻（12の272のB）等々の経論にみられる。

3　親鸞の仏道における「信」と「信心」

親鸞の「信心」は阿弥陀如来から回向される他力の信である。その辺りは『教行信證』教巻に「謹んで浄土真宗を案ずるに二種の回向あり。一つには往相，二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信證あり」（『註釈版聖典』35頁，西本願寺刊）と示されている。行巻の冒頭には「往相

の回向を案ずるに，大行あり，大信あり」（同，141頁）とあり，救いの行も信も如来回向のものであることが示されている。教巻には「二種の回向」とあるが，『浄土文類聚鈔』には「本願力回向に二種の相あり」（同，478頁）とある。つまり，往相還相を「二種の回向」といい，また往相還相を「二種の相」といっている。ここの「二種の相」という語に私は親鸞の回向の信の本質をみるのである。「和讃」に「弥陀の回向成就して　往相・還相ふたつなり　これらの回向によりてこそ信行ともに得しむなれ」（同，584頁）とある。「これらの回向」によって救いが成就するというのである。ここには，往相だけでなく，還相の回向によって救いが成り立つことが示されている。

この問題に関しては，当面の課題ではないので省略し拙稿をご参照いただければ幸いである。ここでは親鸞の次の言葉を引用しておく。

> 如来の二種の回向によりて，真実の信楽を得る人は，かならず正定聚の位に住するがゆゑに他力と申すなり　（『三経往生文類』630頁）

ここには「二種の回向＝信心獲得＝住正定聚＝他力」という図式がみられる。ここには親鸞の信心観が明確に示されている。

親鸞における信の系譜は龍樹の「信方便易行」世親の「起観生信」曇鸞の「信仏因縁」善導の「深心」法然の「信疑決判」等々にみることができる。松濤誠廉氏は「通仏教の実内客は殆ど全部が信の中に含まれていることができよう。真宗の如く信だけで一貫する法門が存在しても不思議はない」と指摘している。　（『仏教における信の問題』平楽寺書店）

4　親鸞の仏道における「念仏」の特異性

親鸞は次のように指摘する。

しかれば名を称するに，よく衆生の一切の無明を破し，よく衆生の一切の志願を満てたまふ。称名はすなはちこれ最勝真妙の正業なり。正業はすなはちこれ正念なりと，知るべし　　（「行巻」同，146頁）

ここには，称名＝破闇満願の行＝最勝真妙の正業＝念仏＝南無阿弥陀仏＝正念と示されている。八正道の実践行の中に正業とある。八正道は四諦の真理を自覚し，その実践行として説かれるものである。その中にある正業の語を想起するのであるが，八正道成就にも等しい仏智の世界に立つということであるとみてもよいのであろう。

正念とは「平常心である」といい切ったのは曾我量深である。まさに仏智獲得の世界といっても過言ではない。次に引用する『教行信證』（行巻）の語も親鸞の念仏義を語ってあまりあるものといえよう。

一声すなはちこれ一念なり。一念すなはちこれ一行なり。一行すなはちこれ正行なり。正行すなはちこれ正業なり。正業すなはちこれ正念なり。正念すなはちこれ念仏なり。すなはちこれ南無阿弥陀仏なり

（同，189頁）

5　親鸞の仏道における「智慧の念仏」（信心の智慧）について

親鸞の著述によると「無碍光仏のみことには，未来の有情利せんとて大勢至菩薩に　智慧の念仏さづけしむ」（「正像末和讃」，605頁）といったものや，「智慧の念仏うることは　法蔵願力のなせるなり　信心の智慧なかりせば　いかでか涅槃をさとらまし」（同606頁）「釈迦弥陀の慈悲よりぞ　願作仏心はえしめたる　信心の智慧にいりてこそ　仏恩報ずる身とはなれ」（同）といったものがみられる。

ここには念仏は智慧であり，信心も智慧であるということが示されてい

る。そして，信心の智慧が涅槃をさとる因であることも併せて述べられている。このあたりに，親鸞の念仏義，信心観の特異性をみることができよう。念仏とはただ口に南無阿弥陀仏と称えることにとどまらず，阿弥陀如来からこの身にたまわる，回向された智慧そのもの，仏智の顕現であると示すのである。自己はどこまでも煩悩具足，生死しつつある身である。その自己に仏智をたまわるとき，如来に等しい人生道を歩むことができるというのである。次に親鸞における智慧の用法について簡単にみておきたい。

6　親鸞における「智慧」の用法をめぐって

さまざまな智慧の用法がみられるが，その中心はなんといっても阿弥陀如来が智慧の体得者であるというところにあるといえよう。　たとえば「この如来は智慧のかたちなり」(『尊号真像銘文』652頁）という説示が端的なものである。

（1）　この如来は光明なり，光明は智慧なり，智慧はひかりのかたちなり，智慧またかたちなければ不可思議光仏と申すなり
（『一念多念証文』691頁）

（2）　しかれば大小の聖人・善悪の凡夫，みなともに自力の智慧をもっては大涅槃にいたることなければ，無碍光仏の御かたちは，智慧のひかりにてましますゆゑにこの仏の智願海にすすめ入れたまふなり。一切の諸仏の智慧をあつめたまへる御かたちなり。光明は智慧なりとしるべしとなり　（『唯信鈔文意』700頁）

（3）　帰命は南無なり，無碍光仏は光明なり，この智慧はすなはち阿弥陀仏なり　（『親鸞聖人御消息』十三通，763頁）

といった語がそのことを示している。

また，名号（尊号）についても

（１） 南無阿弥陀仏は智慧の名号なれば （前同，701頁）

（２） 広大智慧の名号を信楽すれば，煩悩を具足しながら無上涅槃にいたるなり （700頁）

（３） この智慧の名号を濁悪の衆生にあたへたまふとのたまへり （713頁）

（４） 選択不思議の本願・無上智慧の尊号を聞きて，一念も疑ふこころなきを真実信心といふなり （703頁）

と「智慧」に即して名号（尊号）を示している

このほか阿弥陀如来のはたらき（力用）に関しては「弘誓一乗海（中略）はなほ涌泉のごとし，智慧の水を出して窮尽する事なきが故に」（行巻200頁）「清浄，歓喜，智慧光（中略）を放ちて塵刹を照らす」（同203頁）「慈悲深遠にして虚空のごとし，智慧円満して巨海のごとし」（『浄土文類聚鈔』485頁）「智慧の光明はかりなし（中略），真実明に帰命せよ」（浄土和讃，557頁）「生死の長夜を照して智慧をひらかしめん」（703頁）といった用例を指摘することができる。また，阿弥陀如来のはたらきは衆生の煩悩悪業を一味平等のものとすることを「尽十方無碍光の，大悲大願の海水に煩悩の衆流帰しぬれば，智慧のうしほに一味なり」（「高僧和讃」585頁）と示している。

他に「一切の有情，智慧をならひ学びて無上菩提にいたらんとおもふこころをおこさんがために得たまへるなり（中略）。念仏を信ずるは，すなはちすでに智慧を得て仏に成るべき身となる」（『弥陀如来名号徳』729頁）とある通り，「念仏を信ずる」というのは「すでに智慧を得て仏に成るべき身となる」ことであるという。

このほか「化生のひとは智慧すぐれ，無上覚をぞさとりける」（正像末

和讃，608頁）「仏智を疑惑するゆゑに，胎生のものは智慧もなし」（同，612頁）と，化生のものと，胎生のものについて智慧あるものと，智慧なきものと示している。最後に人間の実相を智慧なき者として説示したものに「和讃」がある。十方仏国が浄土なのに，なぜ西方浄土というのか，という問いの中で曇鸞は次のように述べている。

鸞師こたへてのたまはく　わが身は智慧あさくして　いまだ地位にいらざれば　念力ひとしくおよばれず　（同，582頁）

人間の智慧は仏智からすれば比較できないほどのものであることを示し，如来の智慧の広大無辺性がここで示されている。曇鸞自身の痛切な自己認識であるといってもよい。

このほか智慧光仏，智慧心，智慧門等々の語も散見する。

7　親鸞における「智慧」の認識――智慧の念仏義の背景――

親鸞の仏道は特異な浄土仏教ではあるが，決して特異な仏道ではなかった。大乗菩薩道という視点に立脚した浄土仏教であることの認識は欠いてはならないものである。いわゆる「現世安穏，後生善処」といったような，浄土往生の仏道をはるかに超えて，この土で浄土真実の教法の導きにより（往相），滅度をさとったのちに衆生を摂化済度（還相），するうという仏道であった。この辺りがさきの「二種の回向あり（二種の相あり）」という『教行信證』等の冒頭の言葉によってみごとに集約されているといえよう。

本論のめざすところも，あとで述べるが，念仏と信心を智慧と規定したその根底には，単なる救済主義をはるかに超える「自覚性」（念仏と信心の覚知性）がみられるという考察である。親鸞の仏道が救済教か自覚教かと問うのではなく，それらを超えた大乗菩薩道の仏道としての救済の自証性

を再認識しなければならない。この点については本論の最後に触れたい。親鸞は書簡において，浄土宗の中に真と仮があり，真とは選択本願であり，仮というのは定散二善であり，選択本願は浄土真宗であると示している（『親鸞聖人御消息集』一通，737頁）。次下に定散二善は方便仮門であることを示しているが，そのあとに

浄土真宗は大乗の至極なり　（同）

と示されている。親鸞の仏道を大乗菩薩道と規定する一つの根拠をここにみる者である。言うまでもなく「大乗の至極」とは，自利利他の仏道の究極である。「自覚覚他覚行窮満」する仏道のことにほかならない。その仏道を親鸞は「往還二回向」の仏道として開示したのである。このことを簡単に図示するならば，

仏道の成就＝智慧（仏智）の獲得＝住正定聚＝必至滅度＝還相摂化の活動態（利他の実践）⇒

ということになろう。

親鸞浄土教は一般的にそれまでの浄土教と同一視され，救済教と言われてきた。絶対他者なる阿弥陀仏による一方的救済（絶対他力とも言われることがある），という視点からの呼称であるといってもよい。曾我量深の「救済教か自証教か」という論考があることも周知であるが，救済教，自証教というもの，そのものについてももっと掘り下げ吟味されなければならないであろう（『曾我量深選集』第10巻）等。

8　親鸞における「智慧」の内実
――親鸞の仏道にみる「さとり」について――

『教行信證』化身土巻に

本願の嘉号をもっておのれが善根とするがゆゑに，信を生ずることあたはず，仏智を了らず。かの因を建立せることを了知することあたはざるがゆゑに，報土に入ることなきなり　（同，412頁）

とある。つまり，本願の嘉号（名号）を如来より回向されたものとしてではなく，私の善根とする（私物化）から，如来に対する信順，報恩のこころがなく，信心を生ずることもなく，仏智を了解，さとることもできない，というのである。ここには，本願と名号（嘉号）と私というものの他力的な性格が如実に示されているといえよう。次に，親鸞における「さとり」という語の用例についていくつかを列挙してみよう。

（1）　往相回向の真因なるがゆゑに，無上涅槃のさとりをひらく。これを『大経』の宗致とす　（『三経往生文類』625頁）

（2）「必至滅度の願成就のゆゑにかならず大涅槃をさとると知るべし」　（『尊号真像銘文』671頁）

（3）　涅槃界といふは無明のまどひをひるがして，無上涅槃のさとりをひらくなり。界はさかひといふ，さとりをひらくさかひなり　（『唯信鈔文意』709頁）

（4）　他力信楽のひとは，この世のうちにて不退の位にのぼりて，かならず大涅槃のさとりをひらかんこと，弥勒のごとしとなり　（『一念多念証文』685頁）

（5）　如来の本願を信じて一念するに，かならずもとめざるに無上の功徳を得しめ，しらざるに広大の利益をうるなり。自然にさまざまのさとりをすなはちひらく法則なり　（同）

（6）　涅槃のさとりをひらくをむねとすとなり（中略）。かの正覺の華に化生して大涅槃のさとりをひらかしむるをむねとせしむべしとなり　（同，693頁）

（７） 安楽浄土にいりはつれば，すなはち大涅槃をさとるとも，また無上覚をさとるとも滅度にいたるとも申す

（『親鸞聖人御消息集』779頁）

（８） いかでか涅槃をさとらまし（「正像末和讃」606頁）必ず滅度をさとるなり（同）無上覚をぞさとりける（同609頁）一子地は仏性なり，安養にいたりてさとるべし（「浄土和讃」573頁）いかでか真宗をさとらまし（「高僧和讃」596頁）

とあることが知られる。

（１）は往相回向の成就によって無上涅槃のさとりをひらくことが示され，これが「真実之教」といわれる『大無量寿経』の究極（宗致）であるとされる。（２）は第十一願成就によって，必ず滅度に至り大涅槃をさとることが示され，（３）では無明煩悩のまどひをひるがえして，無上涅槃のさとりをひらく世界を涅槃界であると示す。（４）はこの世のうちに不退の位にのぼり，かならず大涅槃のさとりをひらくことは弥勒と同じであるという。（５）では本願を信ずること（一念）は，無上，広大の功徳，利益を獲ることであり，自然にさとりをひらく法則（本願を信じて一念すること）であると示している。本願を信ずる一念が「法則」であるという説示が興味深い。信の一念のとき，救いが，さとりが成就するのは，阿弥陀仏の約束事であり，必然的事実であるというのがこの「法則」という語である。親鸞の信心への密度の高い信頼性をあらわす語であるといってもよいであろう。親鸞の言葉をもってすれば「願力自然」ということになろう。

（６）は善導の「法事讃」（下，575頁）の「致使凡夫念即生」の解釈であり，ここの「致はむねとすといふ。むねとすといふは，これを本とすといふことばなり。いたるといふ。いたるといふは，実報土にいたるとなり」（692頁）と示されるあとにみられるものである。

つまり「涅槃のさとりをひらく」ということが「むね」(「本とす」)，究極であるということを示したことばである。

（7）は（6）に示されている通り（正覺の華に化生して）「安楽浄土にいりはつれば」大涅槃，無上覚をさとるといい，「滅度にいたる」というのであると示されている。（8）は『和讃』のいくつかにみられるものであり，ここでは「涅槃」「滅度」「無上覚」「仏性」「真宗」をさとると示されるのである。

周知のごとく親鸞は晩年に至ってさかんに「如来等同」「便同弥勒」と言うことを述べている。このことは書簡等に照らしてみても明らかなところである。八十五歳頃の製作とされる「正像末和讃」五十八首のなか九首に「さとる」「さとり」等の語がみられる。その内容は今述べた通り「無上覚」「大涅槃」「涅槃」「等正覚」「滅度」といったものである。

9　親鸞の仏道における救済教と自証教
――その契機としての智慧の念仏――

聖道門自力の仏道にあっては「此土入聖」が通規である。それに対して浄土仏教にあっては「彼土得証」が標傍される。このような認識の中にあって，親鸞浄土教，親鸞の仏道は特異な性格をもつものであるといってもよいであろう。それは，親鸞の信仰，思想の中核である「現生正定聚」（現生不退）と「滅度」とのかかわり，さらに「信心」と「往生」（即得往生と難思議往生の必然関係）の問題等にそれはみられる。

浄土仏教といえば「彼土得証」という語のみで集約されることが多いが，親鸞のそれはいささか趣を異にするものがある。つまり，「往生」（滅度）は，すでにこの土から始まっているという視点を有してるということであ

る。それが「現生正定聚」説の展開である。臨終から始まるのではなく，今，ここから念仏者の歩みが始まるように，その歩み，信心の行者として生きる歩みそのものが，「滅度」に向かっての歩みであるという。

しかし，その歩みと信心の営みはいうまでもなく，阿弥陀如来の本願真実のうながしによって成り立つものである。それが「正定聚不退の位に立つ」（現生正定聚）念仏者のありようである。

正定聚は本来，彼土の領域でのことであった。しかし親鸞はそれを「今生」のこととした。これが親鸞浄土教の特色のひとつである。このことに関して，さきに述べた『一念多念証文』の文章を引用したい。

> 「即」はすなはちといふ，ときをへず，日をへだてず，正定聚の位に定まるを「即生」といふなり，「生」はうまるといふ，これを「念即生」と申すなり。また「即」はつくといふ，つくといふは位にかならずのぼるべき身といふなり。世俗のならひにも，国の王の位いにのぼるをば即位といふ，位といふはくらゐといふ，これを東宮の位につくがごとく，正定聚の位につくは東宮の位のごとし，王にのぼるは即位といふ，これはすなはち無上大涅槃にいたるを申すなり。信心のひとは正定聚にいたりて，かならず滅度に至ると誓ひたまへるなり
>
> （同，692頁）

これは，先述した通り善導の「法事讃」の「致使凡夫念即生」という文言の註釈である。親鸞は「世俗のならひにも」とことわりながら，東宮の位にいる人はかならず王の位につくように，正定聚の位にある人はかならず無上涅槃にいたる，と譬喩をもって示している。

最後に「正定聚」等に関する語について述べると，「正定聚の位」（18）「正定聚に住するに」（11）「正定聚に入る」「大乗正定聚に入る」（４）「入正定聚之数」（３）「現生正定聚」「入正定聚の機」（１）「必定」（７）「不

退転のくらい」（5）「不退転」「不退転地」（2）「等正覚」（7）「如来とひとし」「補処の弥勒」（3）「弥勒とひとし」（2）といったものが，親鸞の著述にみられる。親鸞の信仰，思想の中にあって「正定聚」の思想は重要な位置を占めていたことがあらためてわかる。そこには，この上で仏智をたまわるということが念仏を回向されることであり，信心獲得の世界であることを示したものである。

その帰結として「滅度をさとる」「無上覚をさとる」という世界につながっていくのである。阿弥陀如来による救済が「滅度をさとり」「無上覚をさとる」存在となって，利他行としての還相摂化の行を営む身となる。このことを「浄土真宗は大乗の至極なり」と声高らかに主張したのが，親鸞であり，この世界が親鸞浄土教の核心であったといってもよいであろう。以上みてきた通り，親鸞浄土教を単に救済教とし，さとりの宗教ではないということがかならずしも正鵠を得たものではないことがわかる。

親鸞の仏道は往相還相の二回向をたまわった者が「智慧の念仏者として」この土を行きぬき，滅度をさとったのち利他行（衆生救済）に奉仕する成仏道であったことを確認しておきたい。

参考文献

拙稿　親鸞における信の構造――還相回向の思想史的意義――（『武蔵野女子大学研究　紀要27号』）